

部族民通信

YOUTUBE

神話学 6

^ 2

人類学

講座

蜜から灰

2023年10月~24年7月期

部族民通信 人類学講座 レ  
ヴィストロースを読む

神話学 Mythologique

部族民通信 SNS活動


ホームページ [WWW.tribesman.net](http://WWW.tribesman.net)

ブログ <https://blog.goo.ne.jp/tribesman>

XTwitter部族民通信@9pccwVtW6e3J3AF

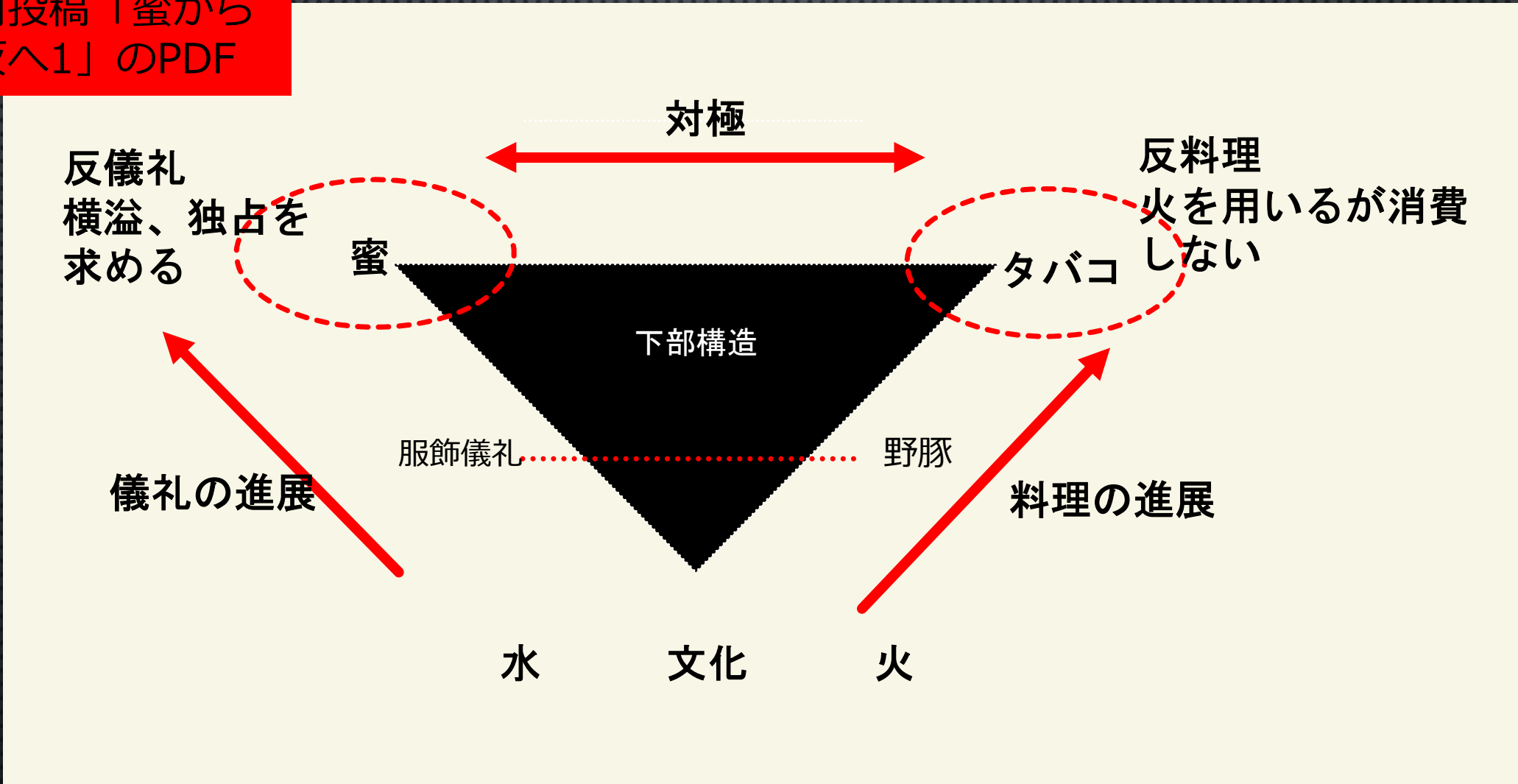


Claude Lévi-Strauss  
1909~2009  
(Bororo族調査時、1936年)



Mythologique  
神話学 Du Miel  
aux Cendres 蜜  
から灰へ 2

参考スライド  
前投稿「蜜から  
灰へ1」のPDF



しかし

文化生活は楽ではなかった

食卓に肉は積み上がらない

蜜は採れない

人々はより良き生活を模索した

誘いは自然から

蜜はあふれ、食べきれないまでに肉が食卓に積み上がる

しかし幸福は続かなかった

「楽園の喪失」が主旋律、  
仕組まれた出会い、そして破局を奏でる1部3曲の組み合わせは2部に  
して6の合奏

カエルと蜜蜂変奏曲の始まり

## 今回紹介する神話

M233 蜜の精Maba Arawak族

M235 蜜蜂の婿Simo Warrau族

M237 カエルAdabaの冒険譚 Arawak族

次回に 折れた矢 と Haburiの冒険

M233 「蜜の精Maba」 Arawak族 本書129頁

Jadis, les nids d'abeilles et le miel abondaient dans la brousse, et un Indien s'était rendu célèbre, par son talent à les trouver. Un jour qu'il creusait un tronc à coups de hache pour tirer du miel, il entendit une voix qui disait, « Attention, tu me blesses ! » Il poursuivi son travail avec précaution et découvrir au cœur de l'arbre une femme ravissante qui lui disait s'appeler Maba, « le miel ». et était la mère du miel. Comme elle était toute nue, l'Indien rassemble un peu de coton dont elle se fit un vêtement, et il lui demanda d'être sa femme. Elle y consenti à la condition que son nom ne fût jamais prononcé. Ils furent très heureux pendant de nombreuses années. Et, de même qu'il était universellement tenu pour le meilleur chercheur de miel, elle s'acquitt une grande réputation à cause de la façon merveilleuse dont elle préparait le /cassis/. Quel que fût, le nombre des invités, il lui suffisait d'en préparer une Jarre et cette Jarre unique les mettait tous dans l'état d'ébriété souhaité. C'était vraiment une épouse idéale.

Pourtant, un jour, comme qu'on avait tout bu, le mari sans doute éméché, cru bon d'excuser auprès de ses nombreux invités. « La prochaine fois, dit-il, MABA en préparera davantage ». La faute était commise et le nom prononcé. Aussitôt, la femme se changea en abeille et s'envola malgré les efforts de son mari. Dès lors, la chance de celui-ci disparu. C'est depuis cette époque que le miel est rare et difficile à trouver.

M233 「蜜の精Maba」 Arawak族129頁

昔はの～、森に入ればミツバチの巣なんてどこにでも見つけられたものだ。蜜もたっぷり採れたのだ、あの頃は。いつもながらに木を穿っては「マバは、マバはどこに」と男は問いかけて捜していた。どこからともなく若い女の叫びが

「気をつけて、私を傷つけないで」声の出所は幹の内から、怪訝な気持ちを抱くも注意深く、蜜狩人はさらに幹を抉ると空洞（蜜蜂の巣のありか）の手応え。男は斧を先にすすめ開けきって見ると、なんと蜂の巣の代わりに輝くばかりの女が現れた。「私の名はマバ（=蜜）、あなた、私を呼んだのでしょうか」と恥ずかしげに語る。恥ずかしさには理由がある、なぜって女は全裸、男はわずかばかりの綿布をかき集め、与えると女は前を隠した。妻にならないかと尋ねる男を見詰めながらMabaはゆっくりと頸をタテに振った。

たった一つの条件とは「私の名を絶対に他の人に教えないでね」

仲睦まじく二人は暮らす。

マバは蜂蜜酒を夫の宴会に欠かさず用意した。その晩、珍しく樽が飲み尽くされた。男は数多い招待客に言い訳を申すが良からう、ほろ酔い気分だったのだろう、明晩には十分な量をマバに用意してもらおう。うっかり本名を口にした。すぐにマバはミツバチに変身しては空に消え去った。男は森に迷い込みマバ 声張り上げても二度と現れなかった。うっかりミスが男の約束破り、叫んだとてその名に届くはずで遅し。以来誰が呼んでも蜜の精は出てこない。

「蜂蜜を採取するに額に汗の一日が必須、それほどにも貴重と化したのは男のうっかり、約束破りのせいだとさ」



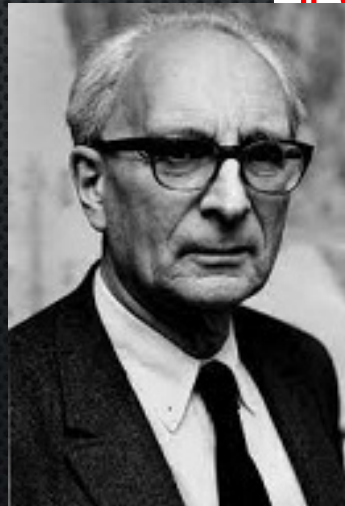
ミツバチ巣に見つけたのは金色に輝く女Mabaの裸身だった



## 自然と文化の同盟

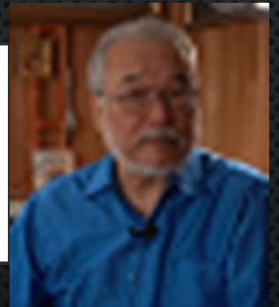
出会いは男と女  
きっかけは偶然か、仕組まれたか

破局は  
偶然か、仕組まれたか



偶然なの  
じゃ

仕組まれて  
いるので  
は？



M235 (Abeille devient gendre, 蜜蜂の婿 Warrau族、135頁)

La fille avait ses règles, elle prévint son père qu'elle ne pourrait l'accompagner pour dresser le boucan, et faire la cuisine puisqu'il lui était interdit de toucher un ustensile. Les trois hommes allèrent seuls à la chasse, mais ils revinrent bredouille. Il en fut de même le lendemain, comme si l'état de la jeune fille leur porter malheur. Le jour suivant, les chasseurs repartirent et la jeune fille, qui se reposait dans son hamac au campement, fut surprise de voir un homme s'approcher. Et partager sa couche en dépit du soin qu'elle prit de l'avertir de sa condition et de la résistance qu'elle opposa.

Mais le garçon eut le dernier mot. Il s'installa auprès d'elle en protestant de la pureté de ses intentions. Certes, il l'aimait depuis longtemps, mais pour le moment, il voulait seulement se reposer, et il attendrait le retour du père de la demoiselle pour la demander en mariage de la manière qui convenait.

Ils restèrent donc couchés côte à côte, devisant et formant des projets d'avenir. Le jeune homme expliqua qu'il était un /Simo/, c'est-à-dire un membre de la tribu des abeilles. Ainsi qu'il l'avait prévu et annoncé, le père rentrant campement, ne manifestera aucune surprise à la vue d'un homme couché dans le hamac avec sa fille. Il freignit même de ne rien remarquer.

M235 ( 蜜蜂の婿 ワラウ族、135頁 ワラウ族居住地はギニア)

父が息子と娘を引きつれ狩に出た。娘は月の障りをむかえたのでキャンプで休んでいると、誰かが近づく足音に驚いた、若い男（シモ）が娘に近寄り褥を共にした。

シモは蜜蜂の化身、見初めた娘が兄弟から離れ一人になるのを待ちかまえていた。故にこの出会いは蜜蜂、自然側が娘を狙うとの仕掛けが設けられた。ここは「娘は障り中であると彼に告げ、抵抗も試みた」の訳となるが、抵抗したのは「同衾」であると字面通りに読みたい。シモは娘と褥を共にしたのみ（それ以上は無かった）とは文脈（最後の言葉、約束）で明確。少年は誓いの言葉を告げ、己の意図の純真さを示しながら娘の横に滑り込んだ。実に随分の前から、少年は娘を愛していたーに続く（南米先住民の慎み深さは幾度となく神話に描かれるが、ミツバチだってヒトに負けない）。

父と兄弟は一日中、狩りに出るが獲物を見つけれない。今日も手ぶら、疲れ切ってキャンプ地に戻る。今日もまたボウズ（獲物なし）。妹の褥の脇に若者が立っていた。翌日、結婚の儀が行われた。

Simoは義父ら三人にキャンプ地に留まるようお願い、一人で狩りに出た。たちどころに、とてつもない数の獲物を持ち帰った。その重さは残った3人が運ぼうにもできなかった。

キャンプ地では望み通りの肉が手に入り、帰村できるに至った。Simoは軽々と大量の干し肉を背負い、歩みに遅れる事もない。

村ではSimoの望み通り全てが順調に進展した。

妻の妹二人はSimoにただならぬ関心を持つ。ある昼下がり、沐浴時間、妻から子をあずかりSimoは木陰であやしていた。義妹二人も沐浴を始め、Simoの関心と呼ぼうと水を掛けた。義妹の水掛けは成功したのだが、突如シモが叫んだ。焼ける、焼けてしまう。転げ回って蜂に戻って空に消えた。

蜂は水気を極端に嫌うとワラウ族は言い伝える。

M237 (Arawak族 Adabaの冒険譚 histoire d'Adaba 140頁)

兄弟の狩りはこのところ不調。妹が一人キャンプに居残る。樹性カエル(樹の洞に住む)がWang Wangと啼いた。《Auprès quoi cries-tu? Tu ferais mieux de cesser le bruit et m'apporter de la viande》お前、カエル。何のために啼く、それを止めて幾ばくかの肉を持ってきたらどんなに嬉しい事やら。ため息をついた。するとAdaba(カエルの名)は人に変身して森に入った。さて、兄らがキャンプ地に戻ると妹が肉を焼いていた。語り筋はM235と同じで狩りは永らく坊主《bredouille》なのに肉を焼いている。横に男が立ちその姿が奇妙だった。

Adabaと名乗る男は兄弟達の狩りが思わしくないと知ると、彼らが持つ矢を検分し、苔むしが過ぎる「狩りがまずいのはこのせいだ」指摘した。妹に木間に紐を張らせ、兄弟には紐の真ん中の的を射るよう命じた。兄弟は的に狙い矢をしっかりと命中させた。Adabaは「その放ちが拙い」。正しい矢の射方は；

《au lieu de viser l'animal, il tirait sa flèche vers le ciel et c'est en tombant qu'elle se plantait dans le dos du gibier》獲物を狙うのではない、彼は矢を空にはなつ。放物を描いて獲物の背を抜くのだ。翌日から兄弟は獲物多数を担ぎ戻る。

嫁が「一緒に水浴びしない」と誘う。《Non, je ne me baigne jamais dans ce genre d'endroit, je ne me baigne que dans les arbres creux où il y a de l'eau》それがし、そのような場で水浴びなどせぬ。木の洞に水は溜まる。そこでしか水浴びはせん。嫁はAdabaに三度水を掛け、沼からあがって夫を掴み抱こうとしたら、Adabaはカエルに戻って森に逃げた。

神話学 蜜から灰へ 自然と文化の同盟、破局



Adaba伝授の曲打ち弓芸なれば  
飛ぶ鳥も狩り取れる、弓が自慢のボロロ族青年、それくらいは俺だってと友人は対抗意識で見返す  
挿絵オオハシ（本書316頁）写真は著作から

M233 蜜の精Maba

出会い 蜜狩人が蜂の巣穴に全裸のMabaを発見

破局 禁忌（本名を言ってはならない）を狩人が破った

M235 蜜蜂の婿Simo

出会い Simoは娘を見初めた

破局 義妹が嫌がるSimoに沐浴の水をかけた

M237 カエルAdabaの冒険譚

出会い Adabaは娘の願い通り肉をたっぷり持ち込んだ

破局 Adabaの嫌う川の水をかけた

Mabaと男の出会いは偶然（aléatoire）か仕掛けられたか(programmé)。

男が呼ぶ声「Maba出てきて」をMabaが聞いた。それは蜜狩人の「蜜はないか」作業の掛け声なのだけれど、（偶然に）聞いたMabaは己が呼ばれていると理解して巣から逃げ出さなかった。巣板を剥がされて、裸の姿まで見られてしまった。隠し布を当ててくれるほどに男は礼儀正しい。そして求婚、こんな場面に追い籠められたのだから「仕方なく」受け入れた。

これが文の流れ、全てが偶然、aléatoireの出会いである。

文脈はかく淡々と偶然を装うが、この出会いは自然からの仕掛け、そうと先住民が語りかけていると部族民小筆は解釈する。仕掛けに何かが潜むならそれが自然の意志。文化への同盟の誘いかけである。

偶然を装った金色の輝きは蜂蜜ではなく、見よがしに晒した女の裸身とは仕掛けも上々の企みである。

偶然aléatoireであるさらなる理由 ;

第一行 « Jadis, les nids d'abeilles et le miel abondaient dans la brousse »  
「昔はの～森に行けば蜜が流れるほど…」は古老の懐かしみ、たしかに天国は出現した。約束した禁忌を破った男のうっかりで天国が破綻した。このうっかりが偶然aléatoireと語られる。偶然が発生し、偶然で終結した。

でもそうだろうか。起因は男の酩酊、注意力弛緩が陥穽。うっかりではなく安逸がもたらす傲慢が約束を破ったと考えられないだろうか。「人は天国に住むに値しない」の結論に自然がたどり着いた。仕組まれた楽園は人の安逸で消え、生きるこの世の苦しみに人が追放された。

(フランス翰林院会員にして構造主義の先達、レヴィストロースは「出会いは偶然、名前を漏らした失敗もうっかり」と説く。この差異を対比させる後述)

自然と文化の束の間の同盟

出会いは男と女

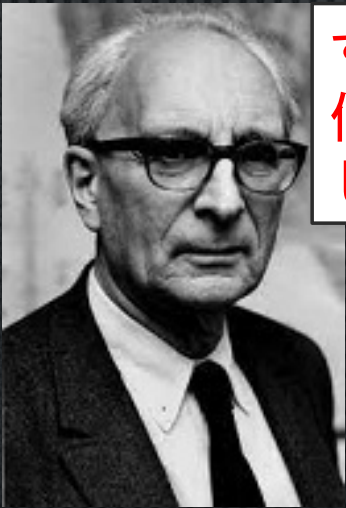
ヒトが蜂の女王を見初める

蜂の若者が娘に惚れる

カエルの若者が娘の危機（獲物を獲れないのはお前のせいだ）を救う

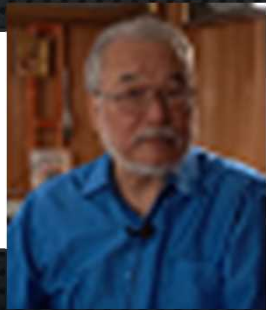
破局は禁忌破り、押し付け

偶然か、仕組まれたか



すべてが  
偶然なの  
じゃ

仕組まれて  
いるので  
は？



MabaM233はこの地に酩酊天国を具現化した、SimoM235神話ではSimoの狩りで夫婦、姻族も恵まれたたらふく生活を過ごす。Adabaは狩りの技術をもたらした。他人がうらやむ「焼肉の楽園」、義妹がSimoに関心を見せたのは、狩りの成果を他系統に流すを阻む義父母の差し金であろう。

自然と文化の同盟、破綻のきっかけ。

Mabaでは夫が取り決めに破った。Simo神話での義妹の水あびせは文化の恣意性が見え透く。沐浴での水あびせは女の能動性の意思表示、肉を我が系統に独り占めする企て、色恋に先立つ「系統への懸想、同盟を阻害する」食い気のあから様さが読める。文化の自然から忌避される。

偶然の裏に隠れる文化の恣意が、自然の恩寵の上に楽園が成り立つ宇宙的事実を忘れる人への預言と捉える。3の神話の訴えかけはここに見える。

元曲のMaba神話（M233）、第1変奏がM235のSimo、Adabaは第2変奏

レヴィストロースは[蜂=>蜂、カエル] [女=>男]（性が逆転した）と説明；

1. 3神話ともに自然側から文化へ同盟しようとの誘い。男女の出会いには自然からの仕掛けが秘められていた、娘って可愛いもんだ（レヴィストロース解釈と一部ずれる）
2. Mabaが「文化」の環境で働く様は「甲斐甲斐しく」と肯定的に描写されている。Simo/Adaba神話でも働くは自然側（蜜蜂、カエル）

自然と文化が同盟すれば、自然の恵みを自然の努力で（いとも手易く）文化が幸福を享受できる、黄金時代は創成できる、しかしそんな天国が続くものか—神話が生きる人に諭している。

# MABA蜂蜜の女王、SIMOカエルの若者変奏曲

融和、出会い、対立 禁忌破り、破局 (神話学 蜜から灰への考察)

神話番号 進行			M233	M234	M235	M237	M238	M239
筋立て	内容	選択は	Maba神話 蜜がふんだん	蜜に飽きたと失礼な言葉に応報	Simo神話 蜜蜂の婿	Abada カエルの婿	Wauuta 狩り技法	狩人の機転
1 禁忌	実体（物と接触してはならぬ）か言葉か（名を言っは、誰かと教えてはならぬ）	Réel/Verbal	—	—	+	+	—	+
2 互換か その物か	語は互換している、物は互換ではない、その物でしかない。	Compatible/ Incompatible	+	+	—	—	+	—
3 恣意か 偶然か	部族民通信の解釈はすべての出会いは恣意（レヴィストロースの解釈を括弧に）	恣意性Ordonné 偶然性Aléatoire	+	+	+	+	+	NA (+)
4 同盟	結ばれたか、結ばれなかったか	Rapprochement Produit / Evité	+	+	+	+	+	+
5 そして	継続・断絶	Conjonction/disjonction	—	—	—	—	—	—

# 自然と文化の同盟

## 出会いと破局

偶然（レヴィストロース）

計画（部族民）



Mythologique  
神話学 Du Miel  
aux Cendres 蜜  
から灰へ 2 了